

# 神と神々について

——コメンテーターの立場から——

山下 太郎

このコメントは、元来東京大学の田丸徳善教授が、担当される予定のものであった。同氏のご病気の為私が代理を依頼されたのは、私が学会の大会会場と成る隠岐へ出発する、四日前の夜であった。当然、準備も不足のまま出掛けた訳であったから、コメントもお恥ずかしい内容であった事と思う。ところがその後で、このコメントの内容を、学会の機関誌の為に纏めるように、と言われた。光栄の至りである。

ところで困ったことに、私はほんのピンチヒッターのつもりであったから、大会が終わると、当日の会場でのメモなども、用がすんだとばかりに、ホテルの屑籠に放り込んで、出て来てしまっていた。当然後の事も、念頭に置くべきであったのに、私も随分不用意だった、と言う外はない。

したがって、以下は私のうる覚えを元に書くものである。色々

と不備の所もあるかと思うが、是非ご寛恕を賜るようお願いしたい。なおまた序でながら、ここでは当日述べるつもりでいて、時間の都合で触れられなかった事柄についても、若干敷衍して、述べさせて頂きたいと思う。

## (一) 提題としての「神と神々」に対する私見

先ず一般論として、この提題は二つの問題を含んでいる、と私は考える。その第一は、無論「神とは何か？」という事である。ここでは、神の意義に関することと同時に、単独で神といわれる場合の意味と、複数で神々といわれる場合の意味とが、併せて問われねばならない。

この後のことが、第二の問題を浮き彫りにする。つまり、「神と神々」という題目が設けられたということは、すばり言って、

一神教か多神教かの問題が問われているものだ、と解しなくてはならない。

それがこの提題を設けた、発案者の御意図に相違あるまい、と思う。そこで、コメンテーターとしての立場から、次のように先ず、私見を述べさせて頂くことにする。

第一の問題についてだが、私はここで、神の本質論を述べるべきだ、と考えるのではない。ただ、これは比較思想の学会なのであるから、各々の民族や宗教において、神はどのような意味に理解されているか、ということを考えてみるべきだ、と思う。

先ず広く印欧原語に由来する各地の言語において、例えば、Zeus, Jovis, Dyausなどは、光あるいは光り輝く空を意味する、と言われている。ラテン語の普通名詞となった、deus もこれと同根であろう。

後にキリスト教によって、悪魔を指す言葉にされてしまったデモンにしても、ギリシア語(daimon)の原義においては、万物を照らすものの意味であった。ダイモーンはギリシア語においても、神というよりむしろ一段低い、精霊を指すように言われているが、もともとは神格を示す言葉であって、後で格下げされたものではあるまいか。

これに対して、god (Gott) という語はゲルマン系の言葉で、辞書には、「訴願せられる存在」(das angerufene Wesen) が原義、という説明がある。だが、原義の方はともかくとして、北欧神話

の印象などからすると、この言葉には、「力ある者」「力能者」のような観念がつきまといているように、私には思われてならない。

これに対して、中国の文字である「神」は示と申との合字で、天上のカミを示す、と言われている。「示」は、祭壇の形とも、あるいは天の日月星の意、などとも言われているが、いずれにせよカミの意を示す偏(へん)であろう。これに対して旁(つくり)の申は雷電の下半と同じく、イナヅマの光を象るもの、とされている。だから原義からすると、北欧のカミ Thor (Donar) に似る、というべきであろう。

ちなみに、精神とか神経とかいう場合の神は、カミの意味の神ではなく、身の意の申が使われたものだという事を、最近亡くなられた佐藤一郎元北大教授から、生前に伺ったことがある。してみれば精神の神は、心に宿るカミという意味ではないことになる。日本人は、神の字を天上のカミばかりでなく、地上のカミにも当て、また悪神や邪神なども書く。中国にもそのような使い方があるかどうか、寡聞にして詳らかにしないが、ともかく日本人は、この点に関していうと、極めておうようである。このことは、日本のカミが元来中国の神よりも、広い外延をもつ用語であることとに基づくもので、昔は天神地祇と書いて、アマツカミクニツカミと読ませたのであった。

日本語のカミの原義については、古来さまざまな説があって、異論続出という所だが、私は学習院大学名誉教授の寛泰彦氏のお

説に非常な共感を覚えている。算教授は、カミのミが乙類のミであることに着目され、これを身あるいは実の義に解していられる。また、カは彼方の意味に取られている。従って、カミとは自分に對する彼方の実体ないしは存在ということになり、日本人の実感に添ふ意味の言葉、と解するにふさわしい。

私はかつて、旧制高校の大先輩である算氏に、この問題について親しく御指導を受けた経験があり、その御意見を参考にさせて頂いて、日本人の神観についての一文を草したことがある。その論文の中では私は、日本人の抱いた靈格に関する觀念として、チ、タマ、ミコト、カミなどの意味を、一つのカミ觀念の發展、という立場から論述したのである。

ともあれ、このように古代日本人の意識におけるカミが、靈的な意味での *Anderssein, Jenseitssein* であるということになると、学会のシンポジウムにおけるこの提題には、極めて相応しいカミ觀念であったと思われる。なぜなら、この規定によって、かなり広範な領域の問題を、包括しようと考えられるからである。

そしてまた、この事が第二の問題に對する私どもの自由な対応をも、可能にするのである。何故かという、神が独りであるか、それとも多数でありうるか、などという議論はそもそも、キリスト教のような神觀念からすると、とうに解決済みの問題として、改めて問ひようもない議論となる可能性も、あるだろうからである。神格を唯一のものとするか、それとも複数のものとするか、と

いうことは、カミを男性とみるか、女性とみるか、はたまた両者とみるか、という違いと同様に、人間の立場からする表象の違いと見られないこともない。しかし、一神教が正しいか、それとも多神教が正しいか、という議論は、単なる擬人觀的な表象のレベルにとどまらぬ、神学上の根本的な問題を含んでいることも、事実である。

従来多神教は一神教に比べて、劣った宗教であるような見解が常識とされており、多神教から一神教へ進むのが、宗教觀念の進化であるようにも、見なされてきた。しかし、この点については、反論も様々な側面から論ぜられうるのであって、いわゆる一神教が、単なる唯一神の信仰に、終始しえているかどうか、当面の大きな問題である。

もっとも、議論を専ら量的な観点にとどめるのが、不当であることは言うまでもない。一層重要なのは、その神の性格をどう見るかという、質的な観点である。しかし、ここでこの議論を、これ以上進めることは差し控えて、提題者各位の報告内容に関連して、改めて取り上げることにはしたい。

そこで、これから各報告者の主張についての、私からのコメントを述べさせて頂くことにする。以下、その内容を述べるに当り、一々お名前を挙げてコメントするのは、いかにも礼を失するようになってしまうので、全て報告者という呼び方にして、記述することとするが、御諒承を賜りたいと思う。

## (二) ギリシアの神々に就いて

——辻村誠三氏の報告に対するコメント

このシンポジウムの課題も、いつものことながら、非常に広汎すぎる問題であるから、全てに亘って論ずることの不可能なのは当然である。従って、特定の観点からのアプローチとなることは避けられず、その態度をとやかく言うべきではない。ただいづれにせよ、そのアプローチがどれだけ問題の核心を衝いているか、ということが重要であろう。

ここで報告者が、ホメーロスの神々を取り上げて論じられたことは、それなりの見識に基づかれたことであって、貴重であると思う。その御研究は極めて緻密であり、私もこの御報告から教えられる所は、多大であった。報告者の御努力には、深く感謝申し上げる次第である。

それに報告者は、併せてヘーシオドスにも十分触れていられるのだから、方法的な観点として何も言うべきことは無い。私がコメントーターの立場として伺いたい事柄は、専ら内容に関する次の二点だけである。

その第一は、神々の体系的な構造に関することである。

報告者は、ギリシアの個々の神々が、主として「オリュンポスの神に算え入れられる」とき重要な神格に限られる」にもせよ、その「全体的な構成」が他の地域の神々の場合に比べて、特に勝

れていることを強調する。すなわち、「ギリシアの polytheism が多神教の単なる並存ではなく、ゼウスを長とする統一的な構造をなすことが明らかに」なれば、「これはおそらく、たとえば Veda の神界とのけじめをなすもの、ではなからうか」と言われるのである。

私も実はこのことについて、ヘーシオドス以後のギリシアの神に関する限り、何等異論があるわけではない。報告者はここで、ギリシアの多神教の、他の一切の異教的多神教と異なる所以を、説明しようとしたのであり、それ故にまた、ギリシアの神は、「神々にして神、神にして神々、つまり、多にして一、一にして多」と語られたのである。

そこで私の見解だが、ギリシアの神にしても、その觀念やこれに対する信仰の生れ始めたそもその最初から、このように整っていたとは限らないのではないかと、思うのである。そのことは、当り前といえ、極めて当り前のことで、先刻御承知のことと言われるのが、当然かも知れない。

だがそれであればなおのこと、大切なはある時期に、この最初の混沌に秩序をもたらしたという、まさにその努力の意味である。その点から見れば、ギリシアで『神統記』が果たしたと同じ意味の努力を、Veda 以後のパラモンが、成し遂げなかったと言われえない。

私は、Veda の神々にさえも、全くの無秩序ではなく、天界・

空界・地界の別はあり、秩序の萌芽はあったと信じている。日本神話の場合、西暦第八世紀の遅れた所産であるとはいへ、立派な神々の系譜、つまり神統記を有していて、驚くばかりである。出来れば、この日本的な神統記に比べて、ギリシアのその優る点を、伺わせて頂きたかった。なおこの点については、後の報告者の所で、再読したいと考えていることが、色々とある。

報告者はまたその説明の中で、デュメジル (Dumezil) の三機能説にもふれられていて、興味深く拝聴した。私もこの勝れたフランスの神話学者の卓見には、大いに教えられたし共鳴する点も少なくない。しかし私の不満は三機能説の場合、神々を王権・軍事・生産の三機能の、いずれかに分類することに熱意を専ら集中して、同一の神の内における複数の機能の共存や、その機能の転換という、流動的な現象をとかく軽んじ勝ちになることにある。

北欧やインドの神々を見ると、主神の座を占める神でさえ、相互に転換するのである。神話も宗教も、たえず生成し発展する。ギリシアの神の場合だとて、同じ事が起こらなかつたとはいえない。ホメーロスにさえ、その痕跡がなくてはなないと私は思うのだが、多分賢明な報告者も、御自身ではとうに、この事をも承知していられたのではないかと考えるので、この点も伺えたら良かった。次に第二の問題は、ギリシアの場合、異種の神々との関係を、どう考えたら良いか、ということである。

オリュンポスの神々が代表であることには、無論異議は無いの

だが、ギリシアの神はこれだけにはとどまらない。この外に、ガイアやウーラノスらの天地開闢の神もあれば、クロノスに代表されるティーターノスの神々もあるのである。特にティーターノスの一族とオリュンポスの神々との対立は、ギリシアの神話的宇宙観にとつても、非常に重要な意味を持っていると思われるのだが、いかがであらう。

何故、このようなことを問題にするかといへば、ここには、神の地位に関する両極観が現れている、と見られるからである。神々との対極観は、北欧神話にもあるし、日本神話にもある。しかし、その対立抗争の性格は様々で、一方では「神々の黄昏」による終末が結果するが（この場合対極の一方は巨人だが）、他方では「國譲り」による共存が成果である。ギリシアの場合、いわゆる Gigantomachia をも含めて、抗争の意味はどのように理解したら良いであらうか。

ここには、民族の闘争が関係しているのか否か、単なる自然神と人格神との区別が意味されているのに過ぎないのか、それとも善悪二原理の対立闘争が含蓄されていると解すべきかどうか、伺いたい所は多い。ギリシアの神々の「統一的な構造」と言われるものの中に、このような対極構造が含まれているということは、やはり素晴らしいことだと思っただけに、その意味を闡明することは意義深い試みだと、感ぜずにはいられないのである。

この点については、これまでも随分論議が重ねられてきてい

ることなので、ある程度の解答はでているのだが、それを伺えれば幸いであった。

### (三) キリスト教の「新約聖書」の神に就いて

——八木誠一氏の報告に対するコメント

報告者は、キリスト教でも特に「新約聖書の神」と断って、報告をせられた。前のかたと同様に、全ての場合を併せて論ずることとは困難であり、かつまた、キリスト教の真髄を語るものが、新約聖書であることは明白である以上、問題をこの点に絞って論究されたのは、大いに賛成である。

ところで、「新約聖書の神」を取り上げる場合には、それと區別して比較される、それ以前のもの為何か、という点についても、考えて見る必要はある。これには、二つの道があり、それは區別した方が良く、というのが私の考えである。その一つは「旧約聖書の神」であり、もう一つは「ユダヤ教の神」である。この二つの中のいずれを取るかによって、問題の争点はかなり変わって来るように、思われるのである。

無論ごく常識的に見て、旧約の神もユダヤ教の神も、新約の神も、唯一神そのものとしては同じ神で、少なくともグノーシスでない限り、変わりがあるはずは無い。ここはしかし、そのことを問題にするのではなく、その神についてのそれぞれの場合の表象の仕方の違い、と言って悪ければ、その神の人間に対する啓示の

在り方の違い、を問うている訳である。その点から見れば、旧約やユダヤ教の神と新約の神が違うのは勿論だが、旧約の神とユダヤ教の神も同じとは言えない。

報告者はレジュメの冒頭に、「新約聖書の神観念の背景には、キリスト教の母胎としてのユダヤ教の神把握がある」と書いていられるし、その後に行われていることも、ユダヤ教の思想に関することに相違ない。してみれば報告者は、ユダヤ教（少なくともキリスト教成立以前の）との比較をしていられる、と見て差支えあるまい。そして、それはそれで結構である。

ところで、ユダヤ教ではイエスの役割を評価しないから、新約（新しい契約）という言葉（その観念は後期預言者イェレミヤにすでにあるが）を、キリスト教の意味には理解しない。その聖書も「旧約聖書」とは呼ばず、「律法書・預言書・諸文書」などと称しており、内部の章の配列や評価も、旧約聖書とは異なっている。

ユダヤ教団そのものの成立も、バビロンの捕囚から解放されて帰国した後の、紀元前五世紀のことで、それ以前はむしろユダヤ教にとつても、その前史である。だから、レジュメの本文六行目の「後期ユダヤ教」は、「後期預言者」とされた方が良かった。

これに対し、もしもまた「新約聖書の神」を「旧約聖書の神」と比べるという場合ならば、両者の関係は単なる相違と解すべきものではなく、前者は後者の新しい啓示、あるいは成就、と言わなくてはなるまい。

さて、報告者がその本論として言われたことについては、おおむね私にも異論は無いが、特にその部分に関しては、次の二つの点を質問させて頂きたいと思った。

その第一は、やはり一神教と多神教との関係である。

キリスト教が新約の教えにおいても、一神教であることは当然だが、しかしユダヤ教のような極端な一神教でないことも、事実である。それは、三位一体の教義に照らしても、明らかである。

この教義が、西暦第四世紀の教会会議において確認された時、カッパドキアの三大学者の一人ニュッサのグレゴリオス (Gregorius of Nyssa, 331-394) が、三位一体説は、異教の多神論と極端な一神論との中道を示すものだ、と説いたといわれる。極端な一神論、つまり単独支配説 (Monarchianism) とすること、ユダヤ教が念頭にあった、というのも事実である。

唯一神の信仰が、宗教の立場として最も進歩したものだとは、よく言われることである。しかし現実において、イスラミズムの場合にその例が多かったように、信仰上の徹底した一神教が、しばしば政治上の極端な専制政治を擁護する理論と成ったケースも、少ないとは言えないのである。

周知のように古代の民主政治 (demokratia) は、キリスト教出現以前の多神教のギリシアにおいて生れた。多神教が常に民主的だという訳ではないが、至高の権威が単一でないということは、少なくとも社会的には、複数の評価を受入れる可能性を許すもの

である。ゲルマン的多神教の影響がないとはいえぬ西欧の世界で、宗教改革の結果生まれた新教が、西欧的民主制とうまく合致しているというのも、甚だ教訓的である。

もっとも当面は政治上のレベルが問題の次元ではないから、専制支配の如何で神の論議をすべきではない、という反論もありうると思う。そのとおりだが、純粹の神学上の問題としても、「一切にして一切」(Ten kai pan) という神の本質は、「一即多の原理と合致しうるように思うが、いかがであらう。

私は、キリスト教の三位一体の教義が、この一即多の原理に叶いうる、と思つてこの質問をしたのだが、それにマッチした御返事は伺えなかつた。

質問の第二は、報告者が「イエス・キリストは神と民イスラエルの関係を修復した」と言われた、その「修復」の意味に関するものである。

その後が続けて、また「(それに) とどまらず、神と全人類の間に新しい関係を作り出した」と書いていられるが、これには何の異論もない。前段の「修復」という御意見は、しかし大変面白い見方で、私も興味をそそられた。報告者が「修復」と言われたのは、いうまでもなく旧約の時点で(ここは敢えて「ユダヤ教」と言わず、「旧約」と言わせて貰う)、イスラエルの民が神との関係を破壊したからである。「後期ユダヤ教(預言者)」においては、神と民との関係の破れを修復する存在としての救済者が待望され

ていた」と報告者は書いていられる。預言者イザヤらの言葉には既にメシア預言(救済)、ならびにキリスト預言(償い)の思想が、現れている。

「破れの修復」という解釈は非常に面白いが、無論この場合関係を破る原因を作ったのは、民つまり人間の方である。人間が自ら神に背いたことによつて、関係を破つたのであるとすれば、この関係を修復するのも、人間の側の責任でなくてはならない。ところが、その修復を果たすために、特に神の子が期望される。これは何故であらうか。

この説明は、修復の理論だけでは難しい、と思うがどうであらう。やはり、従来から言い古されて来ているように、人間が深い罪びとであつて、己れの力では己れを救い得ないから、ではないだろうか。ここにはやはり、修復という外面的な行為だけでは規定し切れぬ、内面の問題がある、と言わなくてはなるまい。

#### (四) 日本に於ける神概念の諸相について

——野崎守英氏の報告に対するコメント

報告者はまず、日本における神々のあり方を考える場合に、二つの迫り方があるとされる。その一つは、神話に登場する固有名をもつ神々の特徴や関係から、問題に接近するやり方であり、もう一つは、人(ひと)的なものとは異質なものとして、神という名辞で捉えられているものの在り方を、掘りおこすことから問題

に接近するやり方である。

報告者は、この後のやり方を採用すると言われ、そのテキストとして『日本書紀』の、神代ではなく、特に人代の方を選ばれた。そしてその中において、人間の世とされる場で神と名ざされる現象が、どのようなイメージで記述されているかを洗い出し、そこから、神というものがどんな姿で浮かび上がってくるかを、見ようとする。

これは、方法論としても非常に面白い、新しい行き方として、大変興味深く拝聴した。またそのための資料として、『日本書紀』の神武天皇から推古天皇までの関係記事に丹念に当たられたのであり、これは私どもにも大いに参考になる方法と思われた。

私は近代西洋哲学を専攻する身であるが、最初は日本の古代思想を研究する目的で、東大の国文学科に入学し、後に事情があつて哲学科に転科した人間である。それゆえ『古事記』や『日本書紀』は、今でも繰返し愛読している書物である。

その立場から言うと、『日本書紀』ばかりではなく、『古事記』をも参照されたなら、一層面白いと思つた。『日本書紀』はどちらかというところ、大和朝廷の権威を強調しようとする意図が目立つ書物であり、記述の仕方がものによつては、必ずしも公平でないようにも、思われるからである。

『古事記』の方が、この問題に関係する記事は少なく、比較的あつさりしていることも、事実である。そのため『日本書紀』の

方を選ばれたかとも思うし、いずれにせよ、短い時間の御発表でもあり、『書紀』に限られたことに、異議がある訳ではない。

そこで私の質問としては、このことをも含めて、やはり前の御二方の場合と同じく、日本の神々の觀念における質と量との問題を、再び取り上げることとした。ここでは質の問題から、先ず始めることにする。

従つて質問の第一は、日本の神々にも善神と悪神との別があるが、その区別の基準は何と考えられるのか、ということであった。

これは実は、報告者の前述の方法とも、関連するものである。というのは、前述の方法に基づく資料選択の結果として、『書紀』の性格上どうしても取り上げる事例が、善神の記事に比べて、悪神や祟る神に関する記事の方が、多く選ばれることとなったからである。

そればかりではない。『書紀』の「人代の巻」においては、祟る神や荒ぶる神などの性格と、これに対決する人間の態度との詳しさに比べると、善い神々の性格の描写の方は、あまり、はつきりとしてはいないのである。この点ではむしろ、「神代の巻」の記事の方が、優っているように感じられてならない。

だからといって、私は報告者をこの点で、非難するつもりでは毛頭ない。報告者は、いわば当時の人間の実存状況からして、日本の神々の性格を説明しようと、試みられた訳である。これは私どもが、かねがね主張している、思想の究明への実存論的アプローチ

一にに近いもの、と見なしても差支えあるまい。

しかしこの方法にも、それなりの陥穽が無いことはないのである。人間の实存状況というものは極めて個性的で、多面的、かつ流動的なものである。それは、捉える側の態度によつても、様々の様相を呈しうることに、注目を怠つてはならない。

同じ実存状況とは言つても、支配する側の立場と民衆の立場とは違ふし、国家のレベルと個人のレベルとでも違ふ。若しその叙述の態度が、大和朝廷の權威を強調しようとする意図に基づくものであったなら、物事の価値評価もそれに準じている、と考へなくてはならない。

このこともあつて、私は善い神と悪い神との区別の基準を、お尋ねした訳である。それに対する報告者のお答えは、確か大和朝廷や天皇皇族に対する敵意の有無、という事であつたと記憶する。必ずしも民衆や個人への害意の有無、ではなかつたように思う。

『日本書紀』の人代の記事を中心にして判断を下せば、そういう結論が出るのは当然である。これに比べて、『古事記』をテキストに選ばれたとすれば、あるいはもう少し、異なつたお答えが伺えたのかも知れない。

質問の第二は、日本人の神意識が、多神教的であることは無論だとしても、その特徴はどのようなものと考えていられるか、ということであつた。

日本の神々は、西洋の神と違つて、大抵は流動的であり、可変

的である。山の神が春となれば、地に降りて田の神と成り、秋になればまた、田を離れて山に帰る。正月に家々を訪れる年の神（歳徳神）は、松の内が過ぎれば他所に移るので、松飾りは松の内が過ぎると、取り払わなくてはならない。

日本の神々は、要するに折口信夫氏も言われたように、まればびとの神であり、よりましたの神なのである。アリストテレスの言うような、「不動の原動者」(kinoun aineton)ではないのである。かといって、その可動性というのは、ギリシアやローマの神の場合のような「軀身」(metamorphosis)とも同じではないのである。

私は、日本人の神意識の中には、一種の汎神論的な傾向があるように思う。正月に行なう神社詣での場合などに、我々は一般にどんな態度で、神社選びをするであろうか。そこに祀られている神格を確認した上で、参詣の可否を決定する、などということは、普通には行なわれないのではあるまいか。近いからとか、皆が行くからとか、あるいは神域が立派だから、などという単純な理由で、神社選びをしているのでは、ないであろうか。

私は、神信仰の実態を調べるために、神社を訪れる度毎に、その御神体を調査することになっている。それについて、最近も面白い体験をしたことがあった。ある地方の、昔一の宮と呼ばれた、名のある神社を訪れた時の話である。例によって、その神社の御神体のことを尋ねると、相手の巫女が明らかに嫌な顔をした。

「そういうものは知りません」と云う。

神主に聞いてくれと頼むと、変わったことを聞く嫌な人だという顔をしながら奥に入った。ところが、その後も大変であった。その神社に詰めている人々が、順に私の言葉を伝えて囁き交わした末に、その中の一人が、これを読んでくれ、と一枚の印刷した紙を渡してくれたのである。一口で答えてくれれば良かったものを、何で手間取ったのか、さっぱり訳がわからなかった。

これを私なりに注釈すれば、要するに場所と人間が大切であって、神自体は何でも良いということである。かといって、人々に信心が無いのではない。神はどれでも共通で、区別の必要がないということである。これを、汎神論的と言わずして、何と呼びえよう。

汎神論にも二種類あって、一つは一神論的であり、もう一つは多神論的である。スピノザの思想が前者だとすれば、日本人の場合は後者ではあるまいか。もっと厳密な言い方をすれば、汎神論的傾向の強い多神教ということに、なるのかも知れない。

この私のコメントに対する報告者のお答えが、あの時どうであったか、残念ながら私ははっきり記憶してはいない。以上が隠岐の大会のシンポジウムにおける、私のコメンテーターとしての報告である。報告者の諸氏には私の妄言を謝し、親切な御応答を感謝する。

(やました・たろう、哲学、日本大学講師)